

<BIZ とシマダの今>

青山での個展がシマダの仕事のスタート。現在 17 年目を迎えている。デザイン、加工、販売、すべてが正しく理解できないまま、業界との接触を求めることもなく、ただ努力を重ねていたという印象が残る。05 年、はからずも“世界で 10 人の作家”の一人として NY へ行ったのを機に気持ちが悪くなった。世界中から集まった作家たちとの交流。NY の街を歩いていてふと“私は私のままでも良いのだ”と。当時のシマダの仕事は日本の貴金属業界と全てがかけ離れていることの居心地の悪さと不安も感じていた。現在もまだ商売の仕方は解らない。ただシマダはシマダであり変われるものでもなく、美しく仕上がるまでは試行錯誤を繰り返すしかない。美しいと感じてもらわなければ手に取ってもらえない。喜びや感動も感じてもらえないから。これは傲慢ではなく謙虚な気持ちでそう思う。“温かい良い商売とは”と語ってくれる人や多くの人に助けられつつ仕事が続けられる事に感謝の日々をすごす。



1999 青山個展

<旅の苦勞と感動>

ここ数年は国内旅が多い。国内の旅は余りに楽で気が抜ける位。海外のひとり旅は緊張する。というのも流暢な英語が話せるのでもなく、しかも相当な間抜けで重度の方向音痴症。時折日本人魂が出て自己主張もする。“日本人をナメンなよ”と。そうは言いつつも根が間抜けなので、マンハッタンの上路に広げた地図を回転させつつキョロキョロ。いつの間にか何人もの人が回りを囲み“どこに行きたいの”となり夫々があちこちと指さしている。そんな間抜けな人に道を聞く人もいる。一人旅は苦勞と不安が多い分だけ感じることは極めて多い。かつてイタリア国内 2ヶ所だけ行きたいと計画するもやむなく個人旅を諦めツアーに参加。なんと山道を迷いもせずエスカレーターで登る如くに順調すぎるのだ。見たい場所には個人行動でも出かけたが帰国後も見事なほど感動というものが出てこない。行ったということだけが残る。以前、南アフリカジンバブエの空港に降り立ち待てどもスーツケースが出てこない。乗り換え時間が迫り紛失証明を握りつつ一週間、移動先から問い合わせ。現地の下着は特大麻袋の如くで入手不可。やがて何も持たない、化粧もしない快適さを覚えた。そこで得た感動の数々は今も鮮烈に甦る。



金沢：鈴木大拙館

<漱石という人>

今年夏目漱石没後 100 年ということでネット上での読み物が毎朝の楽しみになった。X年前の○月△日漱石は～であった、と記事は始まる。英国留学中は全ての状況が苦しく神経を病む程の中、切手代も惜しいのに境子夫人にママにスケッチ入りなどの手紙を送る。頭髮が薄いのを気にする妻にロンドンの様子を描き、あなたの髪は立派なものです。こちらの人はずっとずっと少ないのです、と。(ところがママでない妻は滅多に手紙を書かなかった)。シマダは漱石の小説は殆ど読んでいない。専ら手紙、論文、講演等等。そこには漱石の誠実で優しい人柄が偲ばれ心温まる。友、教え子への生活、仕事、病などに細やかに配慮を施す。反面、上司からの要求の書きたくもない論説の痛快さ。大学屋(東大教授)を辞して新聞屋(朝日新聞)への入社。全て耳と心にしっかりと響く。



ロンドンのヴィクトリア女王時代のポスト

<古代が気になる>

古代といっても BC60 年あたりのカエサルではまだ若い。古代ギリシャが気になる。塩野七海の“ギリシャ人の物語”のスタートは紀元前 800 年あたりから。知りたいのは前 3000 年(日本の縄文期に当たる)頃の事。きっかけは“古代ギリシャ展”。今から 5000 年も前にヒトは思いも及ばない文明を作り生きていたという衝撃。その展覧会は余りにも膨大な規模で故に図録もメガトン級。持ち帰る体力、気力はなくネット注文もまだ。数年前、フランス政府開催による高名かつ高齢な日本人美術家の個展のオープニングセレモニーに出席することが唯一の義務という格安旅に参加。パリ滞在 4 日のみ。“二ヶに会えるこれが最後かも”と参加即決。と、ふとある事が頭をかすめる。島田さんてどんな人?と聞かれた人。“う～ん、さしずめ宇宙人かな”と答えたと言うのだ。勝手に人をミイラにしないで欲しいと反撃したが気付けば宇宙人説を唱える人は他にもふたりいた。5000 年前の人と宇宙人は別物だが気になるのはやはり古代人である。

.....



裏面カットアクアマリンの
小ぶりカジュアルバージョン
ルビー、サファイアに護られ
ビビッドに誕生



大人ジュエラー達への一品
しっかりしたダイオプティ
ーズの結晶を支えるダイア、
サファイア達の醸し出す
気品とパワー